

イメージとしての「伝統文化」

—茶会とアフタヌーンティーの饗宴を事例に

“Culture of Tradition” as the Image

— the Case Study of Tea Ceremony and the British Afternoon Tea in Japan

山口 隆子*

YAMAGUCHI Takako

要約 本論文では、イメージとして求められた「伝統文化」が、ホストとゲストの双方にどのように捉えられ、そして解釈されて、彼らに共有されているのかを考察する。特に、これまで論じられてきた商業的な観光の場におけるイメージの消費ではなく、市井に暮らす、いわゆる普通の人びとが求める「伝統文化」とそのイメージを考える。事例として、ホームステイを活動の中心におく非営利組織が実施した茶会とアフタヌーンティーを取り上げる。ホームステイにおける文化の見せ方で鍵となるのは、対面的な場面でのホストとゲストとの接触のありようや、相互行為から生起するやりとりであろう。さらにホームステイは互いのイメージや本質主義的な視点を乗り越える揺らぎも生む。事例から、グローバル化が進行する現在、互いに規定する伝統文化とその語り、そこに生まれる疑いのまなざし、ほんものの文化議論と彼らが対面した場面でのホストとゲストの役割を示した。

キーワード：イメージ (the Image)、**「伝統文化」** (“Culture of Tradition”)、茶会 (tea ceremony)、アフタヌーンティー (The British Afternoon Tea)

はじめに

本論文の目的は、イメージとして求められた「伝統文化」が、ホストとゲストの双方にどのように捉えられ、そして解釈されて、彼らに共有されているのかを考察することである。

私たちが訪問先で、その国や地域の伝統文化を体験したいと考えるときに、イメージする伝統文化とはどのようなものであろう。ブーアスティンは「メディアによって演出され、創り出されたイメージの方が現実感をもつという知覚のありよう」を鮮やかに描き [Boorstin 1962]、ホブズボウムとレンジャーは、私たちが伝統とみなしているものが、実は近代になって創り出され、構築され、形式的に制度化されたものだと言った [ホブズボウム 1992: 9, 13]。また、筆者がこれまでに学生におこなったアンケートでは、日本への留学生は「日本で体験した伝統文化」として茶道や生け花を挙げるが、他方で日本に生まれて、暮らす日本人学生は「伝統文化としての茶道、生け花や歌舞伎など」を挙げてはいるものの、彼らはそれらの体験が「皆無」だと述べる(筆者注：2012年から2017年までの「観光文化論」「観光施設論」におけるアンケート、延べ人数約500名)。

では、いったい、ホストとゲストが出会う場面では、どのような文化の呈示がおこなわれているのだろうか。

観光人類学は、その初期の論考『ホストとゲスト—観光人類学』から [Smith eds. 1989]、地方色豊かな文化や人びとの暮らしが観光商品の対象となって以降、いかに変容したかを、資本主義経済のもとでのマス・ツーリズム的な観光開発の功罪と共に問い続けてきた。しかしながら、これらの議論は『ホストとゲスト』と並列におくも、商業的な観光施設における、代価を求めた彼らのやりとりを描くに過ぎなかった。そこでは、ホストとゲストの双方が、観光を通してかわり合うような場面の想定がなく、単純な観光開発の善し悪しの議論に終始している。もっと言えば、営利目的の商業的な観光の場面でのホストとゲストではなく、市井に暮らす、いわゆる普通の人びとは、訪問先の伝統文化をどのようにイメージして、実際はどんな体験をしている

*大阪観光大学観光学部

のか。次にみていく。

1. 茶会とアフタヌーンティーの饗宴

本論文では、事例として、大人のためのホームステイ組織 A（仮名、以下、組織 A と表記。本部はアメリカ南部の州にある非営利組織⁽¹⁾）の会員によって企画、実施された茶会とアフタヌーンティーの行事を取り上げる。組織 A は、電機メーカーを定年退職した男性が、近畿圏の県庁所在地にある自宅に事務局を置いて、地域の知人、友人に呼びかけて 2001 年から活動を始めた民間組織である。2017 年現在の会員の平均年齢は 65 歳であることから、大人のためと銘打っていても、主に 60 歳代から 70 歳前後の人びとが中心であり、とりわけ会員の 8 割近くは女性が占める。基本的には 1 週間のホームステイがおこなわれる。組織 A の活動で特徴的なことは、会員たちはホストとして海外からのゲストを受け入れるだけでなく、会員自らも渡航してゲストにもなるといった双方向の活動である。これまでに受け入れはアメリカからの 7 回を筆頭にロシア、メキシコ、トルコやドイツなど 12 カ国に及び、渡航先もアメリカが多いが、オーストラリアやニュージーランド、タイやインドネシア、台湾などアジア地域も含めて 11 カ国となっている。

その組織 A は、今から 12 年前の 2005（平成 17）年 10 月に、イギリスの南西部海岸地域のワイト島、ポーンマス市とサウサンプトン市からあわせて 20 名のゲストを 1 週間受け入れた⁽²⁾。ゲストが到着した翌日に、あるホスト宅において「日英ティーセレモニー交流」と称する、日本の茶会とイギリスのアフタヌーンティーの饗宴が催された。以下は、当日の参加者への聞き取り、受け入れ前の準備会や受け入れ後の反省会における発言や意見と、その後この組織 A から出された会報誌に依拠している。

(1) 饗宴の実施までの背景

まず、この饗宴を計画した一方の日本人ホスト（以下、ホスト H 夫妻と表記）は、夫婦ふたり暮らしの家庭で、夫の S さん（当時 65 歳）は 40 年間勤めた会社を定年で退職後、自宅を拠点に経営コンサルタント業をおこなっている。妻の K さん（当時 61 歳）は大学を卒業後に結婚して以来、専業主婦である。彼らは 2002 年 5 月に、会社時代の上司からの誘いを受けて、この組織 A に入会した。

ホスト H 夫妻はこの組織 A に入会後、これまでにアメリカ、メキシコ、オーストラリアからのゲストを受け入れており、今回が 4 度目のホストである。また、彼ら自身も 2003 年 4 月にニュージーランドで、初めてのホームステイを体験している。ホスト H 夫妻は、今回、来日したゲストの出身地のイギリスに 1 ヶ月間の滞在経験がある。それは 1990 年 8 月のことで、彼らがエジプトに赴任中に勃発した湾岸戦争を避けるために一時的にイギリスに滞在していたのだという。ホスト H 夫妻の海外赴任経験は、このエジプトでの 7 年間とタイでの 5 年間で合わせて 12 年間あまりである。夫の S さんの趣味はクラシック音楽鑑賞で、妻の K さんは手芸やコーラスの活動に参加しながら、自宅ではガーデニングを楽しむ毎日である。

他方、このホスト宅に泊まり、饗宴の提案に賛同して、計画の段階から加わったゲスト夫婦の夫（当時 60 歳）は、既に引退した麻酔医で、法科の大学院に楽しみながら通う毎日を過ごしている。妻（当時 61 歳）は非常勤の現役看護師である。彼らはワイト島に 27 年間暮らす、仕事の関係でこれまでにスウェーデン、オランダ、中国とオーストラリア、北アメリカでの赴任経験がある。夫の趣味はウォーキングと写真、夫人が刺繍、野外活動とガーデニングで、ふたりでスコットランドのフォークダンスを愉しんでいるという（筆者注：本人が事前にホストへ送った自己紹介の電子メールより）。

饗宴のきっかけは、来日前にホスト側が電子メールで、日本滞在中の希望をゲストに尋ねたことにはじまる。その回答は「日本の tea ceremony を体験したい」であった。ホストはそのことを承諾するメールを返す際に「あなたが希望する日本の茶会の用意をするから、是非、あなたたちの国の、本場イギリスのアフタヌーンティーを体験したい」と自身の希望を伝えた。妻の K さんは、この時のことを振り返って次のように話している⁽³⁾。

「日本で外国からの客をもてなす際、日本文化を体験させる意味で茶道をおこなうことが多いが、翻っ

て考えると、迎えるゲストの文化紹介の機会がなかった。そこで、是非、ゲストの文化であるアフタヌーンティーを企画してもらいたいと思い、そう伝えたことがきっかけ」

さらに彼女はホームステイ中の希望として、「常日頃から、ホームステイで受け入れ側のホストが、すべてのお膳立てをして行事を提供するという一方的なもてなしではなく、むこうの文化も呈示してもらおうという相互交流をしたいと思っていた」とことばを繋ぐ⁽⁴⁾。

ホスト H 夫妻はこの受け入れの半年前、4月にアメリカのノースカロライナ州ラレー (Raleigh) からのゲストを迎えたときに自宅で茶会をおこなっており、その経験も踏まえて、今回の茶会を企画した。彼らは自宅近くに暮らす友人で、茶道教授でもある女性に当日の点前を依頼し、普段使いの和室を茶会用に用いることにして、電熱器で簡易の風炉を設える段取りをする。

ゲストが来日するまでに、H 夫妻とゲストは電子メールを通じて、互いに用意するものを尋ね合う。ゲスト側からは「アフタヌーンティー用に生のケーキと紅茶の葉を用意して持って行くので、あなたはきゅうりのサンドイッチの用意をして欲しい」と依頼が届く。

(2) 当日の様様

2005年10月10日にH夫妻の自宅でおこなわれた饗宴は、ゲストの夫婦、72歳のソーシャルワーカーと69歳の教師2名(いずれも女性)と62歳の製図家(designer デザイナー)の男性が加わって5名のイギリス人が集まった。他方、ホストのH夫妻と組織Aの会員たちが入れ替わり立ち替わりで自由に参加し、そこに隣人や知人たちが加わる形となって、延べ人数で40余名が参加した。

まず、午前中に、和室でホスト主催の茶会がおこなわれた。その後、そのホストのもてなしへの返礼として、隣の洋室の居間で、昼食用のサンドイッチなどを食しながらアフタヌーンティーの時間が設けられた。

後日、組織Aから発行された会報誌では、この饗宴は次のように紹介されている。

「日本にもイギリスにも、お茶には伝統的なスタイルがあって、国の文化の一端を象徴しています。本場のイギリスのアフタヌーンティー様式、きゅうりのサンドイッチを下段に、中段には英国からお持たせのケーキ(生菓子)、上段にはクッキー(干菓子)と本格的な三段仕立て。別皿にはスコーンも盛られ、アフタヌーンティー専用のティーでもてなされます」

そして、参加したイギリス人ゲストたちは次のような感想を述べている⁽⁵⁾。

「nostalgic! (懐かしい)。かつては自分たちの子どもの頃はこんな風だった・・・classic⁽⁶⁾!」

「最近はこのようなお茶の時間は習慣になく、日本に来て久しぶりに体験した」

「きゅうりのサンドイッチが、アフタヌーンティーに用いられるなんて初めて聞いた」(62歳男性)

「普段はひとり暮らしで、このような正式な形でのアフタヌーンティーの機会は一度もなく、初めて体験した」(72歳女性)

「自分たちの文化を理解してくれて、日本で紹介してくれたのが嬉しい。イギリスでは楽しくお茶を飲む。反対に日本の茶道には作法があって静かに飲むという、その違いが少し分かった」

「日本に来て、このように自分たちの文化を知るとは思ってもいなかった」

対して、ホスト側の日本人たちは、

「(アフタヌーンティーが) わざわざ本場の様式でなされるとは思っていなかった。」(50代女性)

「和やかな雰囲気でもよかった。(お茶会でゲストが) 簡易の椅子を用いるのも仕方ないかな、足を投げ出したりで厳粛さがなくなるが、交流の面で(楽しめたから) いいかなと思った。」(60代女性)

「正座しなければならぬので（ゲストの足のしびれ他を）心配していたが、椅子を使ったので、思ったほどの（心配な）ことがなかった」（50代女性）

「（連れてきたゲストが）男性だったので興味がなかったかもしれない。夫が参加できないので、私ひとりの判断でこの会に連れてきたが、（英語がうまく話せない私にとっては、彼の本音が聞けずに）そのことが気懸かりであった」（Oさん 60代女性）（いずれも括弧内は筆者補足説明）

饗宴に参加した組織 A の会員たちのほとんどは、結婚前の一時期、花嫁修業のひとつとして茶道を習っていた経験がある。しかしながら、結婚して以降は子育てもあって茶道から離れていたが、彼女たちは 50 代あたりから自身の自由時間ができたこと、そして、外国からのゲストを迎えるホームステイ組織 A に入会して、自分たちの伝統文化として茶道を紹介できるからと、ふたたび、茶道を習い始めている。

(3) 伝統文化を提供した茶道教授の話

茶会を担当した茶道教授と半東役の女性に、当日の様子を振り返ってもらった⁽⁷⁾。茶道教授 Y さんは、ホスト H 夫妻と同じ町に暮らして 30 年になる。彼女は「結婚前の女性のたしなみとして、嫌でもさせられた」茶道に関わり、既に 35 年が経つ。結婚後に自宅で、近隣の知人や友人たちに裏千家の茶道と小原流の華道を教え始め、現在は 7 人の生徒を抱える。手伝いの半東役⁽⁸⁾N さんは、その生徒のひとりである。Y さんは、H 夫妻宅で茶会をするという誘いを受けたときの気持ちを次のように語る。

「裏千家の前の家元（筆者注：15 代家元千宗室）は、一椀から *peacefulness* をという運動で、各国へお茶の親善を図っておられ、海外への茶道の普及にも熱心であることを知っていたから、そのような誘いを嬉しく思い、外国からの客人との交流になるのなら喜んで参加させてもらおう、いいことやと思った。私たちがお茶をいただくのと同じようにどこの国でもお茶はあるし、外国の人は茶会に興味もおありだろうから・・・でもあまり難しいことはしたくなかったので、初歩の点前で盆略点前、それをしようと思った」

当日、その彼女が印象深かったことは、ゲストの正座であった。「たいていの方、座られたでしょ。それには驚いた。でも皆さん（正座が）お上手でねえ」と話す（括弧内筆者補足）。彼女は半年前にこの H 夫妻宅で茶会を催したときに、外国人は体が大きいために正座が困難だということを目の前で見て知ったのだという。そのために、今回は事前に、小さな腰掛をゲスト用に用意していた。

しかし、その小さな腰掛は一部のイギリス人女性が使っただけであった。また、当日、足を投げ出したゲストもいたが、本来は茶室では正座であることをそのゲストが了解していることを知り、茶道教授や日本人ホストたちは特に気にならず、構わなかったと話している。

次に、ゲストが抹茶を飲んだときの様子を、彼女たちはどのように見ていたのだろうか。

半東役 N さん「私が見ている限り、ほとんどの方が残さずすべて飲まれた。いままでのなかではおひとり、男性だけが半分残されたことがありましたね」

茶道教授 Y さん「あら、あなた、よく見ていたのね（筆者注：驚いたように話す）」

半東役 N さん「そりゃ先生、点てたお茶を飲まれるかどうかは、とても気になります」

さらに、茶道教授 Y さんは、外国人をもてなす茶会では、従来の日本人だけでおこなうときとは異なって、用いる抹茶を「外国人にとっては抹茶自体が濃い味だろうからと思って、いつもよりちょっと甘めの銘柄を選んでいる」のだと打ち明ける。その彼女の発言を受けて、半東役 N さんもまた、茶碗に入れる抹茶の量を「実はね、先生。今だから言うんですが、・・・（少し間をおいて）私、抹茶の量は、いつも用いる半分くらいにしていたんです」と明かす。

そして、茶道教授と半東役のふたりが茶席において普段から心がけていることは、季節感を大切にすることだと言い、そのために、用いる道具と菓子に気を配るのだと語る。たとえば、当日、主菓子にはもみじを表したものを用意し、また日本の民族衣装として着物を着て点前をおこなうことも大事にしたいと話を続ける。

半東役 N さんは、茶会当日の写真を持参して「ほら、この方、熱心でしたね。覗き込むようにしてお点前をご覧になっていて・・・(と写真を示しながら)、お茶も全部飲まれたのよ、ね」と話す。しかしこの男性は、先の日本人ホスト O さんが「男性だったので(この茶会に)興味がなかったかもしれない、・・・そのことが気懸かり」と語っていたゲストだった。このように同じ茶会の席という空間を過ごしながらも、半東役 N さんとホスト O さんは、この男性ゲストに対して異なった感想を持っていたのだった。

その後、ホスト O さんは、彼が自宅に滞在中、実は大の紅茶好きだと分かったのだった。それは、ゲスト自らが、イギリスから持参した茶葉を用いて、ホストのために毎朝、台所にはいって紅茶を入れ、ゲスト自身もその行為を楽しんでいたからだという。のちに、O さんは組織 A の例会で次のように話している⁹⁾。

「ゲストは男性だったが、毎朝 6 時に起きて、自ら台所にはいって紅茶を入れてくれる。カップティはいかが? (筆者注: How about a cup of tea?) と声をかけてくれて、カップのある場所やお湯の沸かし方を覚えるようになって・・・私たちホストをもてなしてくれるという、今までにないゲストだった」

筆者は聞き取りの最後に、茶会を催した時に、最低限許される形というものはあるのか、もし、あるならば、それはどのようなものかを尋ねている。

茶道教授 Y さん「お茶の精神が変わらなければいい。おもてなしをする精神さえ守っていれば、ね」

ホストの妻 K さん「それって、難しいわね・・・。そこだけに焦点を当てるのも問題とも思うし」

茶道教授 Y さん「伝統文化としての茶道だけど・・・、かと言って、全て日本のものを用いているかと言えばそうでもなくて。茶室に飾る茶花を最近は洋花を用いるし、容れる器がバルシャの壺であったりして、グローバルなのよ。そうそう最近、あんなん(筆者注: あのようなこと) ありかなあ、と思ったことがある。それは作務衣を着て、胡坐を組んで点前をする。・・・つい最近発行になった雑誌で見て、これは本当に驚いた。そう言えば立礼だって、明治時代に日本に来た外国人がお茶を楽しめるように、と家元が考え出したから、そう考えたら同じような発想でこの胡坐になったのかなあとも思う」

(4) 行事を終えてのホストの語り

組織 A では、ホームステイのホストとゲストの組み合わせは、互いの家族構成や年齢、職業や趣味を参考に決める。今回の場合、確かに、ホストの H 夫妻とイギリス人ゲストは海外赴任経験、年齢と趣味が似通っている。妻の K さんは「同じ趣味なら考え方が似ているだろうし、価値観が合えば互いの距離が近づく。国境なんかないと感じた」と話す。

彼女は受け入れの最終日に、ゲストにこの組織 A でのホームステイの感想を尋ねている。ゲストは「滞在中はたくさんの行事をこなした毎日だったけれど、一番の印象に残っていることは、近所の散歩をあなたたち(ホスト)と楽しんだこと」だと答えたという。妻の K さんは、この彼女の答えを推し測り、「ゲストは連れ回される観光案内よりも、むしろ、自分の素に近い毎日の行動を旅先でもしたいようだし、何気ない普段の生活の中での一場面(の共有が)一番よいかもしれない(括弧内筆者補足)」と、筆者に伝えている。

続いて彼女は、当日、40 名あまりの人びとがこの行事に参加して盛会だった理由のひとつを「会員のみんなが、当日、(同じ組織 A の会員である) B さん宅の茶会に流れて、こっちが少なくなるだろうと配慮して来てくれたのかもしれない」と話し、「そりゃ、向こうの方が立派やから、ね」と続けた。彼女が「配慮」のことばを用い、そして「立派」だと話す B さん宅での茶会とは、いったい、どのようなものだったのだろう。

組織 A では、これまで外国からのゲストを受け入れるときは、定番のように B さん宅で茶会をおこなってきた。というのも、B さん宅は万葉集にも出てくる地名、つまり古くからの土地に在って、家屋は文久 3

(1863)年に建築された日本家屋であり、由緒ある調度品が多くみられるからである。茶道具にしても、いわれのあるものが多く、外国人をもてなすために茶会を催すのには最適の環境と家の設えだと、組織 A のなかでは極めて評判がよいのだ。当の B さんはその評判に対して、筆者にこう語る⁽¹⁰⁾。

「ごくごく田舎で、昔のままの在所で、普段は人の出入りがありませんので、こんなところでも外国の方に喜んでもらって楽しんでいただけるなら・・・(と茶会を持つ)。地名については、歴史を学ぶサークルの方々に、この地が万葉集にも出てくるところと教えていただいたまでのことで、(暮らしている日々の暮らしのなかでは)いつもはそんなことは意識していない。自宅も建てて100年以上にはなるが、水回りなど暮らしやすいように手を入れて改装しております。当然だけれども、当時のままの暮らし方ではないんですよ (括弧内筆者補足)」

彼女は、自身が暮らす土地が持つ歴史的な地名の由来や家屋の古さ、代々続く調度品が、外部からの人びとからのまなざしによって、あらためて目を向けたまでのことという。

2. 考察

(1) 互いに規定する相手文化と疑いのまなざし

述べてきたように、この饗宴、つまりホストとゲストの交流行事のきっかけは、日本人ホストがイギリス人ゲストに、事前に電子メールで滞在中の希望を尋ねたことに始まる。ゲストの「日本の tea ceremony」の希望に呼応する形で、ホストは「本場イギリスのアフタヌーンティー」を申し入れた。

ここには、ゲストとホストの双方が、それぞれに、相手の出身国の伝統文化を、茶会とアフタヌーンティーであると考え、滞在中にそれらを求めている。彼らは、相手の文化の類型化をおこなう意味において文化相対主義的であり、つまるところ、ホストとゲストそれぞれの文化である、と決めつける本質主義的な規定をする。

そして、そのように求めた相手の文化であるために、ホスト側の日本人たちは、イギリス人ゲストたちの行動に目を向け、彼らのことばに耳を傾けたように、実によく彼ら、彼女たちを観察していた。たとえば、アフタヌーンティーの解説をしながらゲストが発する「懐かしい。・・・classic!」、「最近は習慣になく、日本に来て久しぶりに体験」といった声である。ホスト側はまた、ゲストが「きゅうりのサンドイッチは初めて」や「アフタヌーンティーの機会は一度もなく、初めて」の表現も聴き留めている。

ところで、ホストの妻 K さんは、湾岸戦争を避けるために滞在中のイギリスに滞在中、アフタヌーンティーの体験があった。また、彼女はテーブルセッティングや紅茶のマナーといった「本格的英国式アフタヌーンティー」を神戸市内の「フィニッシングスクール⁽¹¹⁾」のカリキュラムで既に学んでおり、アフタヌーンティーに造詣が深かった。彼女は、ゲストがホームステイを終えて離日したあとに、筆者にこれらのことを明かしている。

「そもそも、アフタヌーンティーには、いついつに成立したというように歴史があり、アフタヌーンティーは首都ロンドンに住まう階級社会の人びとのなかでのもので、きちんとした由緒やいわれがあるのよ。実際に今回、イギリスからのゲストを迎えたけれども、彼らのイメージが違った」

そう語る妻 K さんは、ゲストの申し出通りに紅茶の準備をおこない、ゲストがおこなうアフタヌーンティーの解説の耳を傾けて、彼女たちの感想に相槌を打ち、その饗宴を楽しんだ。彼女は、自身がアフタヌーンティーの経験や知識を持っていることをゲストに語らなかった理由を、さらにこう語る。

「つまり、彼女たちは首都のロンドンから離れた南部の地方に住んでいて、田舎ではそのようなこと

(アフタヌーンティー)をしないのだとわかったし、その経験がないのだと感じた。それに気がついてい
ただけど、それをその場でわざわざ持ち出すこともないし、ね。」

翻っていえば、ホストはアフタヌーンティーの教室に通って学び、その知識があったからこそ、ゲストたち
の一挙一動に目を向け、彼らが発することばにより注目をしていたのだろう。ほかにも、日本人参加者たちの
なかに「(アフタヌーンティーが) わざわざ本場の様式でなされるとは思っていなかった」と語った者がいた
が、その女性は夫の海外赴任先のフランスで、フランス人が主催した正式のアフタヌーンティーを体験してい
た。だからこそ、彼女たちは、実によく、ゲストの感想を聞き取って、覚えていたのだといえる。

ここには、相手の伝統文化だと規定して、その解説を受容するだけの受け身ではなく、自ら解釈し、そして
しばしば疑うという能動的な「疑いのまなざし (questioning gaze)」をもって参加しているホストがいる
[Bruner 2005: 95]。

グローバル化が進む現在、伝統文化を語り、実践することができる人びとは、その地に暮らす人びとばかり
ではないのだ。述べてきた組織 A の日本人ホストたちがアフタヌーンティーの経験や知識を持っていたこと
にみてとれるように、もう一方の彼らによって、自身の伝統文化が語られることも起きている。それぞれの地
域や国にあった伝統文化が、国境を超えて、他の地域や国の人びとに広まっていくことは、むしろ所与のこと
だといってもよいだろう。たとえば、茶道の裏千家にしても華道の未生流も、海外に多くの支部が誕生してい
ることは既に周知である。

本論文において取り上げた組織 A の事例では、迎える日本側のホストたちは自身が既に何度か海外におい
てホームステイのゲスト体験があり、他方の訪れるイギリスのゲストたちも同様に、自国においてのホスト体
験があった。彼らはホームステイの期間中、ホストやゲストとしての振る舞い方や、訪問先でその国や地域の
伝統文化を見せられたときに、述べてきた疑いのまなざしを向けていようと、そのこととは別に、ホストや
ゲストとしてどのように接したらよいのか、ということ、を、礼儀としてだけではなく、既に学習しているのだ
といえる。

(2) 対面状況におけるホストとゲストの役割

しかしながら、イギリス人ゲストに、イメージした伝統文化のアフタヌーンティーの体験がなくとも、日本
人ホストや同席した多くの人びとにとって、それは問題とはならなかった。ホストの妻 K さんが「その場で
わざわざ持ち出すこともないし、ね」と語り、アフタヌーンティーの体験や知識があることをゲストたちには
伝えなかったように、実際に問題ではなかったのだろう。

このときのホストの態度は、ゴッフマンがいう役割均衡や面子で説明ができるのかもしれない。ゴッフマン
は、そこに居合わせた参加者は、ひとつのことを同時にやっているという一体感が生まれてくるようになる相
互行為のなかで、コミュニケーションの発信と受信ができる人間として役割均衡が生まれ、参加者は自分の均衡を
維持する機能を持つのだという [ゴッフマン 1985: 112]。また、自尊心のルールと思いやりのルールが組み
合わされた結果として、人は会合のあいだに、自己の面子と他の参加者の面子の両方を立てるようふるまう
傾向も持つ [ゴッフマン 1986: 7]。ホストの妻 K さんは、ゲストの来日前からメールでやりとりを続け、互
いに協力して茶会とアフタヌーンティーの饗宴を実現させた。ホスト H 夫妻は、そのことでゲストとの一体
感が生まれて、日本人の茶会、イギリス人のアフタヌーンティーというように、その役割や面子に添って、当
日、参加していたのであろう。

この饗宴の場では設えられた伝統の慣習であれ、日本人が日本の和室でおこなう茶会とイギリス人が現地か
ら持参した茶葉とケーキを用いてのアフタヌーンティーを、イギリス人と日本人のそれぞれが実際に体験でき
たことに満足している。

ただし、取り上げたこのホームステイの日本とイギリスの事例で、こうした役割均衡や面子を担保できる相
互行為がなりたつ背景には、一定の条件があったことは見落とせない。この事例では、ホストとゲストは政治
的に支配や被支配の位置にあるというものでなく、経済的にも上下関係の問題はない。また、非営利の組織に

おける活動であるために、売買関係にもない。ホストとゲストは、定年を迎えた自営業や現役を引退して趣味で大学院に通ったり、看護師や家庭の主婦であったりと、このホームステイによって（権）力を行使するというものではなく、むしろ、普通の人びとだといって差し支えない。

このため、支配関係を強化するステレオタイプの焼き直しという批判は、少なくともこの交流行事に関してはあまり重要ではない。むしろ互いがステレオタイプを承知して、ホームステイというひとつの社会的場面で、「ホストとゲスト」の役割を演技しているとみるべきであろう。

(3) ホストとゲストの交流の場

ここでもう一度、確認しておきたいことは、この饗宴の目的は、先ず、交流したいことだった。

ホストの妻 K さんは、これまでのように、一方的にホストがゲストをもてなす形ではなく、ゲストも自分たちの文化を呈示するといった相互交流の機会を望んでいた。この行事がおこなわれた日は、近所の人びとも飛び入りで多く参加した。自身の趣味の俳画を持参してゲストたちに見せた人がいた。彼女は、俳画の説明をしていくなかで、その説明に感嘆したゲストに俳画を贈ったという。事前にゲストの趣味がパッチワークキルトだと聞いたある女性は自身のキルト作品を自宅から持参し、ゲストとそのキルトを挟んでキルト談義に発展し、盛り上がっていた。

このように、茶会とアフタヌーンティーの行事は、ホストとゲストのみならず近所の人びとにも交流のきっかけを提供した。この場は、観光客が「地元の人びとと出会って知り合いになる機会を探している」望みや [Smith 1989: 9]、観光客たちが見たいと思っていたホストたちの「本当の生が見られて、彼らと親しくになりたい」願いが叶った場になったともいえる [MacCannell 1976: 93-94]。

茶道教授 Y さんは、ゲストが茶会で簡易の椅子を用いることについて「厳粛さがなくなるが、交流の面で（楽しめたから）いいかな」と話しており、当日の和やかな雰囲気を楽しんでいる。茶道の教授と半東役の女性はその椅子に対しての寛容な気持ちと、ゲストたちがむしろ正座を試みたことに驚いていた。その上で、彼女たちはいつもより甘めの抹茶を用いたり、その分量も少なめに入れたりといった配慮をしており、その場に応じて、茶道のやり方を自在に変えていくという柔軟性がみとれる。

ここには、ホストとゲストの双方が茶会を楽しんでいる姿が確かに存在する。これは、互いが自分たちのイメージの中にある茶会とアフタヌーンティーを、日本の、あるいはイギリスの、というように相手の文化であると本質主義的に規定しながらも、その場の状況に応じて、文化の見せ方やその扱い方を変えていくホストとゲストの姿がある。

また、この行事はあくまでも交流を目的にした行事であって、このことで互いのアイデンティティが侵害されるというものではない。ゲストの「自分たちの文化を理解してくれて嬉しい」という発言や、ホストとゲストがともに、相手からの要望で茶会とアフタヌーンティーを再認識し、伝統のある自文化として客体化をおこなっていることに満足している。しかしそれは、自己のアイデンティティの拠りどころとしてではなく [太田 1998: 70-71, Mckean 1989]、ゲストとホストのそれぞれが互いの位置からである。彼らがともに求める文化は、それぞれが互いにイメージをなぞり、二重三重に重なって作られていくという、すなわち括弧付きの「伝統文化」としてあるといえるだろう。

おわりに：ほんもの議論をこえて—饗宴に対する反対意見

組織 A はこれまでも、会員たちが自分たちのゲスト体験を踏まえて、来日するゲストたちにさまざまな日本の伝統文化の体験をさせたいと、自主的に茶会、生け花、書道や着物の着付けといった企画をおこなってきた。さらに、ホスト側の日本人女性たちは、外国人を迎え入れる組織 A のホームステイによって、自身の文化とゲスト側の文化との相対化を図った結果、以前に習って、親しみのある茶道を再開するという選択が働いている。

しかしその一方で、このイギリスの受け入れ後に開かれた役員会で、ある役員から「日本文化をちょっと見せよう、という、いい加減な日本文化を伝えられない。茶会や着物の着付けとなんでもかんでも中途半端に日

本の伝統文化をみせるのではなく、本物の日本文化を見せて体験させるべきではないのか」という意見が出され、出席した役員のなかでも議論が分かれたという。

その後、一部の会員はこの意見や議論を受けて、しばらくの間、これまでおこなってきた日本の伝統文化の体験の機会を提供することに慎重になったという。しかし、役員会でこのような発言があったとしても、非営利組織 A には、ホストの自主的な伝統文化の企画を止めさせるという強制権はなく、むしろ、ホームステイはホストの自宅でおこなわれる私的空間ゆえに、そこでおこなわれることは、会員それぞれの解釈に任せるといって形に落ち着いた。さらに言うならば、2017年の現在においても、組織 A の会員たちは引き続き、折り紙、書道と着物の着付けなどを体験させる「日本文化紹介デー」を設けて、日本の伝統文化をみせて、体験させる行事をおこなっている。

しかし、この発言者は、いったい何をもって本物と捉えて、この意見を述べたのだろうか。そして、どうして一役員の発言に、組織 A の会員たちがしばらくの間だけでも慎重になったのだろうか。この発言をした女性に、その意図を尋ねてみた⁽¹²⁾。

彼女は、「茶会というのは、ただ、お薄を頂くというものではないでしょ。お茶事があってその一連の流れのなかで、お薄をたてるという作法になる。茶道の中にはもっと大事な意味と注釈があるのよ」と語る。「では、どのような茶会のありようがよいのでしょうか」と尋ねる筆者に対して、彼女は次のように言葉を紡ぐ。

「当日、茶会で使う道具の取り合わせの面白さとか楽しさ、いろんなしなかけを亭主が考えたりする。そして、その問答を亭主と客とがやりとりする、そのような楽しみ方ができることがお茶会のありようだと思うの。

例えば、以前ゲストで来られた方が、静岡の有名なお寺ですごくお茶会をして、格式高いお茶会だったという。でも私は、(ホームステイで受け入れるゲストには)生活の中のお茶を差上げたいと思う。ここは普段の(生活の)場であり、この場は私が自由にクリエイティブに作れる場なのよ」

それでは彼女の考える「自由にクリエイティブに作れる」場の茶会とはどのような形なのだろう。

「クリスマス前にしたお茶会では、聖ヤコブの象徴である帆立貝をしたマドラーを茶杓の代わりに用いて、ボンボニエールを菓子鉢に用いて、掛け軸にアイコンを飾り、彩りとかもクリスマスの色を用いる。足袋カバーのこはぜ部分にスパンコールのついているいわゆる光ものを身につけるなど、遊び心を用いている。これを亭主と客の会話のなかで用いてしちめんどうくさい作法とは違って、ね。自由に・・・」

彼女がことばを重ねるたびに、筆者には、彼女が本質主義的な手法に則った茶会を本物としながらも、実際には、生活の場にある身近なものをもって、季節を意識しながら、その時のありようでもっておこなわれている茶会がみえてくる。

では一体、このクリスマス仕様の茶会と、イギリスからのゲストを迎えてホスト H 夫妻宅で催された茶会とアフタヌーンティーとは、何がどのように異なっているというのだろうか。これらふたつの茶会は、ホストたちがそれぞれに工夫を凝らしておこなっている点では、同じといえるのではないか。

しかし、このように「茶会」の概念が自在に作られ続けているにもかかわらず、組織 A の会員の行動が、本物を見せるべきだと言われて、いつときでも慎重になったのはなぜか。あるいは、お茶会とアフタヌーンティーを主催したホストが、同じ日に催された築年数の長い家屋に住んで調度品に囲まれたホストがおこなう茶会と比較して述べたことばのなかに見受けられた引け目は、何に由来するのだろうか。そこには、人びとがそのときどきの解釈でもって楽しむ「伝統文化」であっても、定型化した日本の伝統文化の型というものがひとつの形、イメージとして彼らのなかに存在するからであろう。

付け加えると、この組織 A は 2017 年から、30 代から 50 代にかけての準会員たちを中心に「着付け・茶道

部」を作り、その意図を「国際交流を進め楽しむ組織 A の会員として、日本の文化である茶道や着物に親しみ、自分でできるようになるとともに、ゆくゆくはゲストにお点前を披露したり着付けをして喜んでいただく・・・」と 2018 年度の総会資料で述べている（傍点は筆者挿入）。このことは 2005 年 10 月の茶会とアフタヌーンティーの行事から 13 年近く経っても、自分たちの伝統文化を茶道だと選び（あるいは、決めて）、それを学ぶ会員がいることを意味する。

そして、2018 年 4 月にイギリスからのゲスト 10 名を 1 週間迎えることが決まり、その受け入れに先立って、会員の中から「アフタヌーンティーを体験しよう」という企画がたてられた。あるホスト予定者の女性会員は、イギリスのゲストにメールを送り「アフタヌーンティーを計画しようと思うのだけれども、あなたの方のアフタヌーンティーに用いるスコン (scone) は、どんな風に作るのか」と尋ねている。その彼女の問いに対して、ゲストは「アフタヌーンティーなんて、最近は自宅でおこなわないし、もし、アフタヌーンティーを味わうのならばホテルのカフェか、街のカフェに行くわ」と返信したという⁽¹³⁾。

これら二つのことから、ホームステイで訪れる海外からのゲストのみならず、迎えるホストにとっても、相手の伝統文化や自分たちの文化に対して、イメージしている「伝統文化」というものが確かに存在するという証左となろう。

付記：本論文は、2009 年 6 月 26 日に神戸大学大学院総合人間科学研究科における博士予備審査論文中間報告会で発表した『ホームステイと異文化理解－世界で最初のホームステイ組織の事例をめぐって－』の「第 4 章 ホームステイと観光」を加筆、修正したものである。

謝辞：本論文の作成にあたり、調査対象先のホームステイ組織 A の皆さまと、茶会とアフタヌーンティーの交流会を企画、実施されたホスト H 夫妻、茶道教授と半東役の女性たちに感謝を申し上げます。

【補注】

- (1) 1977 年に発足後、現在は都市を活動の基本単位としており、2017 年の時点で世界各国・各地域に 370 余りの活動組織がある。
- (2) ゲストの平均年齢は 65 歳で、半数近くが現役を引退した退職者であった。また、かつて従事していた職業は大学教授や教職関係が 9 名、医師や看護師が 4 名、他などで、高学歴の集団といえる。ホスト側の組織 A の会員数は 2005 年当時 80 名、平均年齢 55 歳である。
- (3) 受け入れ前の 2005 年 9 月 11 日に行われた会合において、滞在スケジュールの計画を話し合う中での妻 K さんの発言。K さんは 2002 年 5 月に入会の際に「この会に参加の話は夫から聞かされて入会したが、今ではむしろ私がホームステイを楽しみたい」と期待を述べている。
- (4) 受け入れ後におこなわれた組織 A の例会における発言（2005 年 11 月 5 日）。
- (5) 2006 年 8 月 30 日にホストに聞き取りと、その後他ホストたちに実施したアンケートへの回答から構成。
- (6) ゲストが漏らしたこの classic という発言は、後日、受け入れた組織 A の会員の間で話題になった。というのも、この用語は「懐古主義」の意味なのか、あるいは階級意識を含めた「伝統的な」という意味なのか、単に古いという意味で用いる It is old fashioned style. なのか」といったと意見が噴出した（2007 年 8 月 20 日ホスト H 夫妻宅にて）。
- (7) 2006 年 8 月 20 日に聞き取り調査。当日、集まったのはホストの女性、ふたりの茶道教授、他のホームステイ組織に所属の 67 歳の男性の計 4 名。
- (8) 茶の湯で亭主の補佐役として、手伝いや点てた茶の取次ぎなどをする人 [広辞苑 1998 第 5 版]。
- (9) 2005 年 11 月 13 日におこなわれた組織 A の例会での受け入れ反省会における発言。
- (10) 2007 年 9 月 18 日、聞き取り調査。
- (11) 若い女性の教養学校、社交界へ出るための仕上げ教育のこと。
- (12) 2007 年 9 月 18 日、聞き取り調査。
- (13) 2018 年 1 月 8 日と 2 月 12 日、組織 A における役員会の席上での発言。

【参考文献】

- Boorstin, D. J. 1964 *The Image : A Guide to Pseudo-events in America*, New York, Harper and Row.
- 太田好信 1998 『トランスポジションの思想 文化人類学の再想像』世界思想社。
- ゴッフマン、アービング 1985 『ゴッフマンの社会学②出会い－相互行為の社会学』佐藤毅・折橋徹彦訳、誠信書房。
1986 『儀礼としての相互行為』広瀬英彦・安江孝司訳、法政大学出版局。
- ホブズボウム、E., T. レンジャー編 1992 『創られた伝統』前川啓治・梶原景昭他訳、紀伊國屋書店。
- MacCannell, Dean 1976 *THE TOURIST : A new theory of the leisure class* : University of California Press.
- Mckean, F. Philip 1989 "Towards a Theoretical Analysis of Tourism : Economic Dualism and Cultural Involution in Bali"
Hosts and Guests The Anthropology of Tourism 2nd edition. pp.119-138. University of Pennsylvania Press.
- Smith, L. Valene eds. 1989 *Hosts and Guests The Anthropology of Tourism 2nd edition*. University of Pennsylvania Press.